

讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通

谷本 峻也

はじめに

東播系須恵器とは、平安時代後期から室町時代にかけて播磨国（現在の兵庫県）で生産された須恵器である。なかでも調理に用いられた鉢（こね鉢）は西日本一帯に広く分布することから、当時の流通を考えるうえで欠かせないものである。本講座では、讃岐地域で出土した東播系須恵器の分布などから、その流通について考えたい。

1. 東播系須恵器とは

東播系須恵器は平安時代後期以降、播磨国南東部に位置する神出窯（神戸市）・魚住窯（明石市）・三木窯（三木市）を中心に生産された須恵器を指す（森内・池田 2010）。生産地全体では、9 世紀後葉から末葉に神出窯が開窯し、11 世紀前葉頃に「東播系須恵器」が確立される。11 世紀後半には三木窯が開き、12 世紀前半には魚住窯も形成されるが、13 世紀前半を最後に三木窯は廃絶し、神出窯も急速に衰退する。以後は臨海部に位置する魚住窯が生産の中心を担った（図 1）。

窯体構造 窯体構造は地上式窖窯と煙管状窯が存在する。地上式窖窯は神出窯・魚住窯・三木窯で共通するが、煙管状窯は神出窯と魚住窯でのみ確認されている。

生産器種 椀・小皿・鉢・壺・甕などで、11 世紀後半から 12 世紀後半までは離宮や神社の大規模造営事業が相次ぐ平安京へ向けた瓦の大量生産も行われた。これらのうち、鉢は西日本一帯に広く分布することが古くから認知されており、編年・流通の研究（図 2・3）が進んだ（山本 1976・吉岡 1987・森田 1995・荻野 2006 など）。

近年では、日本中世土器研究会による全国的な集成により、鉢の編年（図 4）が構築された（中世土器研究会事務局 2015）。東播系須恵器鉢の系統は大きく①体部が内湾し、口縁部を外反させるまたは口縁部を拡張させないものと、②体部が直線的に外傾し、口縁部を無拡張または拡張するものに分けられる。時期的には①の方が古い系統である。上記の編年観をもとに讃岐地域で出土した東播系須恵器鉢を示したものが図 5 である。

鉢の形態の変化と年代 ①のうち、最初期に登場するものは体部が内湾し、口縁部を外反させるもの（図 5-1～4）で、11 世紀前葉から 12 世紀初頭まで存続し、徐々に口縁部の外反が弱くなっていく。また、体部が内湾し、口縁部を無拡張（断面方形状）にするものも存在し、これは 12 世紀前半に収まる。概して、①の系統は 12 世紀前半でほぼ姿を消す。

②のものは少なくとも 12 世紀前半には登場し、最末期まで生産が続く。口縁部無拡張（図 5-5）は 11 世紀末から 12 世紀前半にかけて存在する。また、口縁部を上方に拡張

するもの（図5-6～9）は12世紀前半から13世紀後半まで生産される。12世紀前半には口縁部端面を窪ませ、12世紀後半には平滑となる。13世紀前半になると、端面が丸みを帯び、13世紀後半のものは口縁部が大振りとなる。生産地では三木窯でとくに生産される。なお、内方に拡張するものも存在し、12世紀代が主たる生産時期となる。口縁部端面の変化は上方拡張のものと同様である。

他方、口縁部を外方あるいは下方に拡張するものも存在する（図5-9～14）。外方に拡張するもの（図5-9・10）は12世紀代～13世紀前半頃まで確認される。口縁部端面は当初は窪ませ、12世紀後半から13世紀前半には端面を平滑にする。下方拡張のもの（図5-11～14）は12世紀後半から14世紀前半まで存在する。12世紀後半は端面を窪ませ、上方をやや突出させる。13世紀前半には端面を平滑にするが、13世紀後半には丸みを帯びる可能性がある。14世紀前半には口縁部下部（縁帯）を大きく拡張させる。

また、口縁部を両方向（上下方向）に拡張させるもの（図5-15～19）は12世紀後半から15世紀前半まで確認される。12世紀後半から13世紀前半までは上方への拡張が強いが、13世紀後半以降は下方への拡張が強まる。14世紀前半には口縁部を横に引き出すものも現れ、最終的には口縁部を横に引き出しつつ、拡張度を弱める。なお、口縁部を玉縁状に成形するもの（図5-20）もあり、13世紀末から14世紀前半に存在する。

流通 広域流通については12世紀後半から四国北岸地域や北部九州を中心に広域流通することや、13世紀後半以降は播磨とその近隣国を中心とした流通に変化することが明らかとなった（表1・図6）（佐藤重 2016・2022）。

また、讃岐地域では高松城跡下層で和泉型瓦器椀が集中するのに対し、東播系須恵器鉢は少量しか出土しないことから、和泉型瓦器椀とは異なる搬送ルートを想定し、貢納品として集積されたものを再分配するのではなく、播磨から直接出荷されたと想定されている（佐藤重 2022）。

小結 近年の研究成果では、東播系須恵器鉢の広域流通の実態が判明しつつある。そのなかで讃岐地域も重要な位置を占めているが、やや問題が残る。それは讃岐地域での東播系須恵器鉢の出現時期や分布の実態が不明瞭という点である。日本中世土器研究会の全国集成では、その出土点数はわずか15点であり、搬入開始時期が早まる可能性を指摘しつつも、主たる搬入期を13世紀以降とした（図7）（藤本・島田 2015）。また、佐藤重聖が提示したデータも阿讃地域として示されており、讃岐地域の具体的な出土数の変化も不明である（表1）（佐藤重 2016）。一方、佐藤竜馬によると、東播系須恵器鉢は12世紀には讃岐地域で存在が確認され、一定数の出土量をもつ（佐藤竜 2000・2016a）。

以上のように、東播系須恵器鉢の広域流通はその一端が明らかにされつつあるが、讃岐地域では出現時期や出土数や分布の推移など不明な部分が残る。よって、本講座では基礎的なデータを提示し、讃岐地域における東播系須恵器鉢の分布の変化を追いながら、その流通のあり方について検討する。

2. 讃岐地域における東播系須恵器鉢の出現時期とその推移

84 遺跡 378 点を対象に検討する (図 8)。讃岐地域における最古の東播系須恵器鉢は讃岐国府跡から出土したもので、11 世紀後葉に位置づけられる。11 世紀後葉から 12 世紀初頭にかけて、東播系須恵器鉢の出土量は限定的であるものの、12 世紀前半に出土数が微増し、12 世紀後半には遺跡数・出土数が爆発的に増加する。13 世紀前半には出土数が減少するも、出土遺跡数は変わらない。しかし、13 世紀後半になると、遺跡数・出土数ともに減少し、14 世紀後半から 15 世紀前半を最後に東播系須恵器鉢の流通は終了したと考えられる。

このように、讃岐地域における東播系須恵器鉢の出土数の推移は、京・奈良を除く地域において、12 世紀後半に出土量がピークとなり、13 世紀前半以降は減少していくという事象と合致する (佐藤重 2016)。一方、出土遺跡数の面では、13 世紀前半に減少傾向はみられず、ほぼ同数を維持しており、面的分布の観点からは流通のピークが長く持続していたと考えられる。

3. 讃岐地域における東播系須恵器鉢の分布の変化

11 世紀後半から 12 世紀初頭 (図 9) 出土遺跡は限定されており、讃岐国府跡 (坂出市) や、生産遺跡を近傍に控える県道西村遺跡 (綾川町)、港湾施設が確認された高松城跡下層 (高松市) などで出土している。このうち、讃岐国府跡の 2 点が最多であり、官的遺跡や河川・海上交通の結節点などにごく少量みられるのみである。

12 世紀前半 (図 10) 讃岐国府跡や交通の結節点以外にも、高松平野や丸亀平野を中心にほぼ全域に少量搬入されている。ただし、西打遺跡や空港跡地遺跡 (ともに高松市) といった拠点的な集落での出土量が多く、一般的な集落ではほぼ出土しない。

12 世紀後半 (図 11) 島嶼部や港湾、河川沿いに集中しており、とくに高松平野の古高松湾や本津川流域、春日川流域などに加え、丸亀平野の大東川流域に濃厚な分布をみせる。

最大の特徴は港湾施設や拠点の集落はもとより、多くの一般的な集落遺跡からも出土することである。ただし、西打遺跡や延命遺跡のように、一部の拠点の集落に東播系須恵器鉢が多く出土する例もあり、その高い求心力は否定できない。

13 世紀前半 (図 12) 12 世紀後半に引き続き、高松平野と丸亀平野が分布の中心となりつつ、三豊平野や東讃地域でも流通している。出土点数こそ減少しているが、面的分布の観点では 12 世紀後半に引き続きピークにあると考えられる。

13 世紀後半 (図 13) 高松平野は分布域を維持するものの、丸亀平野では土器川や大東川の下流域が分布の中心となる。一方、三豊平野や東讃地域も分布域は維持するが、出土量は急激に減少し、とくに三豊平野では流通に変化がみられる。

14 世紀前半 (図 14) 全体的な傾向は 13 世紀後半とほぼ同様であるが、三豊平野と同じく東讃地域でも出土量が減少し、高松平野と丸亀平野への集中傾向がより顕著となる。

14 世紀後半から 15 世紀前半 (図 15) 高松平野では、臨海部の出土量こそ減少するが、春日川流域では出土量は変化せず、丸亀平野も同様の様相をみせる。三豊平野・東讃地域はと

もにごく少量しか流通しない。

小結 分布上では、高松平野と丸亀平野が主な消費地であったことが分かる。11 世紀後半から 12 世紀前半にかけては、讃岐国府や拠点集落、海上・水上交通の結節点を中心に分布する。一方、12 世紀後半になると、一般的な集落遺跡にも多く出土するようになり、13 世紀前半まで讃岐地域全体への大量・面的搬入が続く。13 世紀後半以降、三豊平野と東讃地域で出土量が急激に減少し、三豊平野では 13 世紀後半に、東讃地域では 14 世紀前半に大量搬入を終える。一方、高松平野と丸亀平野では最後まで流通している。

4. 讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通

前項までの検討によって、讃岐地域における東播系須恵器鉢の分布に大きく 3 つの段階を想定することができる。

1 つ目の段階は 11 世紀後半から 12 世紀前半で、讃岐国府や拠点集落、流通の結節点など限られた遺跡に分布する。2 つ目の段階は、12 世紀後半から 13 世紀前半で、東播系須恵器鉢の搬入がピークとなり、讃岐地域全体に大量かつ面的に流通し、一般的な集落遺跡からの出土数も急増する。3 つ目の段階は、13 世紀後半から 15 世紀前半で、三豊平野・東讃地域への流通量が減少し、高松平野と丸亀平野に分布が集中する段階である。

しかし、これらはいくまで分布の変遷であり、東播系須恵器鉢の流通を検討するためには、遺跡の性格や立地関係も含めた多角的な視点が必要であることは言うまでもない。本項では、上記で設定した諸段階における流通について検討する。以下における「流通」とは、市場原理にもとづき、生産地から商業者を介して不特定多数の消費者(需要)へ生産物(商品)が行き届くシステムを指す。

第 1 段階 この段階の特徴は流通拠点に関係する遺跡や讃岐国府跡に加え、西打遺跡や空港跡地遺跡のような限られた拠点集落を中心に搬入される。つまり、第 1 段階では経済的求心力の高い特定の遺跡における限定的な需要にもとづいて供給されたと想定される。

第 2 段階 ほぼすべての出土遺跡が臨海部あるいは河川沿いに存在しており、河川を用いながら内陸部へ流通したと考えられる。

臨海部に目を向けると、高松城跡下層では荷揚げ場と考えられる礫敷遺構が検出されており(佐藤竜編 2003)、当時の港湾施設の一端を示す。このような自然地形を用いた港湾施設は瀬戸内地域全体で確認されている(佐藤竜 2016b)。

また、島嶼部からの出土事例が示すように、瀬戸内海航路からもたらされた東播系須恵器鉢は各地域の臨海部や河口部に設けられた港湾施設で荷揚げされたと考えられる。積浦遺跡(直島町)や羽佐島遺跡(坂出市)からの出土例を踏まえると、高松平野は児島—直島群島—野原(古高松湾)、丸亀平野は児島—塩飽諸島—丸亀平野河口部の流通ルートが想定されよう。ただし、高松平野では春日川流域に分布が集中するため、春日川河口部周辺が荷揚げの中心だったと推測される。そして、そこから河川を伝い、時には陸路も用いながら内陸部へと搬入され、各遺跡の周辺で開かれていたと想定される市で売買されたと考えられる。

さて、ここで問題となるのが特定の拠点集落に東播系須恵器鉢が集中することである。他の搬入土器では、12～13 世紀前半に讃岐国府跡に白磁の出土が集中しており、余剰品として国府経営層による経済活動に用いられたと推測されている（佐藤竜 2016c）。この事例を踏まえれば、特定の拠点集落に東播系須恵器鉢が一度集積され、そこを起点に各遺跡へと流通している可能性を想定する必要がある。

しかし、拠点集落で出土した鉢の大部分は破片で、器面が摩滅しており、使用痕跡がみられる。このことは高松平野における和泉型瓦器碗のように、破損品を未使用のまま廃棄し、実用に耐えるものが流通する流通中継点/交易品としてのあり方（松本 2009）とは対照的である。

また、讃岐国府跡での輸入陶磁の出土密度は $0.349 \text{ 点/m}^2 \cdot 2.87 \text{ m}^2/\text{点}$ である。それに対し、当段階で最大の東播系須恵器鉢の出土量を誇る延命遺跡（三豊市：12 世紀後半）では $0.001 \text{ 点/m}^2 \cdot 782.6 \text{ m}^2/\text{点}$ 、西打遺跡（13 世紀前半）で $0.0005 \text{ 点/m}^2 \cdot 2146.9 \text{ m}^2/\text{点}$ にすぎない。土器の性格、調査面積や出土個数によるものの、これらは一般的な集落遺跡からの出土頻度と比較しても際立った数値ではないため、余剰を生むほどの集中傾向はみられず、日用品としての保有・消費に留まったとみてよい。

上記をまとめると、出土点数の面では特定集落への集中傾向はみられるが、それは高い経済的求心力によるもので、余剰品/交易品としての保有はなく、日用品として消費されたと考えられる。そして、出土密度の面では一般的な集落遺跡と大差はないため、第 2 段階における讃岐地域への東播系須恵器鉢の大量かつ面的搬入は、荷揚げされたものを特定の拠点集落に一度集積し、そこを起点に流通していくのではなく、各地域の港湾を起点として、河川伝いに内陸部の各消費地へ均質的に流通する、商品としての流通を示すものと結論づけられる。

第 3 段階 この段階には高松平野と丸亀平野に分布が集中するが、浜ノ町遺跡（高松市）に出土点数が集中し始めることは示唆的といえる。浜ノ町遺跡は 13 世紀末に港湾施設と集落が一体化した「港町」として形成され、流通の一大拠点として成長していく（乗松編 2004・市村 2016）。また、大東川流域でも 13 世紀中頃から河口域の宇多津で活発な経済活動が始まることが指摘されている（佐藤竜 2016b）。これらの地域で東播系須恵器鉢の流通量が維持された背景のひとつに、港町の出現が想定される。

ただし、このことは高松・丸亀平野で流通量が維持された理由のひとつになっても、東讃・西讃地域で出土量が激減していく理由にはならない。これらの地域にも港町が存在したことは『兵庫北関入船納帖』にも記載されている。上記の現象を理解するためには、当段階における在産土器との関係を踏まえた検討も必要であるが、現状では明確な背景を述べることはできず、今後の課題としたい。

おわりに

以上、讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通について検討した。最大の画期となる第 2

段階では、不特定多数の遺跡を対象とした大量・面的流通を確認できた。これは大規模な商品的流通といって過言ではなく、今日につながる流通システムの萌芽ともいえよう。

また、12世紀後半には「銭の病」と称される(『玉葉』)ように、中国大陸から大量の銭貨が流入し、従来の物々交換にもとづく流通システムではなく、貨幣を媒介とする流通システム(貨幣経済)が急速に浸透し、平安京や大宰府の二大都市以外にも、さまざまな地域で経済が発展していった。

生産地の動向をみると、12世紀前半には神出窯における瓦生産が急速に減少し、鉢の大量生産が始まる。このことが第1段階における全国的な出土量の増加につながったと考えられる。12世紀後半になると、京都における大規模造営事業が下火となり、東播系須恵器窯全体で瓦生産が低調となり、鉢と甕の生産志向が高まる。そして、瀬戸内海に直面する魚住窯でも鉢生産が本格化したことで、鉢の大量生産だけでなく、大量供給も可能となった。第2段階における大規模な商品の流通は、これらの要因が複合的に重なったことで可能となったと考えられる。

一方、当該期には和泉型瓦器椀や十瓶山窯産須恵器甕のように、広域に分布する土器が存在している(図16)。ただし、和泉型瓦器椀は貢納品輸送の帰り荷として持ち込まれたものが流通したと推測され(佐藤亜2016)、十瓶山窯産須恵器甕は平安京と北部九州を中心とする地域で経筒外容器として用いられており(荻野1993・佐藤竜2016c)、その背景は多様である。

なお、第2段階において、拠点集落でも空港跡地遺跡などでは東播系須恵器鉢の出土量が少ないことは注目に値する。このことは綾川流域にも指摘でき、讃岐国府跡に至っては第2段階以降、1点のみの出土である。また、これらには綾川流域に属する十瓶山窯跡群産の鉢が大量に出土するという共通点があり、とくに綾川流域の様相は十瓶山窯産鉢の流通に制限されたと考えられる。今後、十瓶山窯産鉢も含めた総合的な流通構造を検討していく必要がある。

【参考文献】

- 市村高男 2016 「中世港町の成立と展開-中世都市論の一環として-」『港町の原像(下) 中世港町論の射程』岩田書院
- 荻野繁晴 1993 「中世西日本における国産貯蔵器の分布」『福井考古学会会誌』第11号 福井考古学会
- 荻野繁晴 2006 「播鉢から見た東播焼と備前焼の世界」『吉岡康暢先生古稀記念論集 陶磁器の世界』同成社
- 佐藤亜聖 2016 「東播系須恵器編年研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質-須恵器生産の成立から終焉まで-』考古学研究会関西例会
- 佐藤亜聖 2022 「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四拾周年記念 関西大学考古学研究室

- 佐藤竜馬 2000「第5章まとめ 第1節 高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡Ⅳ』空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 香川県教育委員会
- 佐藤竜馬（編）2003『高松城跡 西の丸町地区Ⅱ』サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第4冊 香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2016a「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1） 9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』香川県埋蔵文化財センター
- 佐藤竜馬 2016b「前近代の港湾施設」『港町の原像（下）中世港町論の射程』岩田書院
- 佐藤竜馬 2016c「第4章総括 第3節 古代末期の讃岐国府」『讃岐国府跡1』香川県教育委員会
- 丹治康明 1985「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- 中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究 26 東播系須恵器-編年と分布から考える-』日本中世土器研究会
- 中久保辰夫（編）2018『須恵器生産からみた播磨』第19回播磨考古学研究会 資料集 第19回播磨考古学研究集会実行委員会。
- 乗松真也（編）『浜ノ町遺跡』サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第6冊 香川県教育委員会
- 藤本清志・島田豊彰 2015「四国出土の東播系須恵器鉢」『中近世土器の基礎研究 26 東播系須恵器-編年と分布から考える-』日本中世土器研究会
- 松本和彦 2009a「野原の景観と地域構造」『港町の原像（上）中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院
- 松本和彦 2009b「中世宇多津・平山の景観」『港町の原像（上）中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院
- 森内秀造 1986「平安時代の窯業生産-播磨地方の須恵器生産を中心に-」『歴史における政治と民衆』日本史論叢会
- 森内秀造 2015「神出窯須恵器の生産地編年の再検討にむけて」『中近世土器の基礎研究 26 東播系須恵器-編年と分布から考える-』日本中世土器研究会
- 森内秀造・池田征弘 2010「播磨国（兵庫県）東播窯・神出窯・三木窯・魚住窯」『古陶の譜 中世のやきもの-六古窯とその周辺』MIHO MUSEUM。
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 山本三郎 1976「Ⅱ安富中学校東遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（宍粟編）』 兵庫県教育委員会
- 吉岡康暢 1987「東播系窯と珠洲系窯-須恵器系中世窯の成立をめぐる-」『考古学ジャーナル』 280 雄山閣出版
- 吉岡康暢 1997「新しい交易体系の成立」『考古学による日本歴史 9 交易と交通』 雄山閣